メメント・モリ

根来　澪子

3月も半ば、なにやらうすら寒くて目を覚ましたのは明け方の四時頃であった。気が付いたらベッドからかけ布団がずり落ちそうになっている。よくあることで、足で布団を蹴上げて直そうとしたら突然膝から足のつま先にかけて激痛が走った。一瞬足がつったのかと思ったが痛みの様子が違う。否応なしにぱっちりと目が覚め、立ち上がろうとした。

しかしすんなりと立つことができない。ベッドの枠につかまってなんとか立ってはみたが力が抜けて歩くことができない。非常事態に大いにあわて、辺りの家具につかまりながら歩行を試みる。しかし何故か、足が進まないのである。周りはまだ暗い。足に何が起こったのか、自分でも理解できずに空が白み始めるまでベッドに座り込んでいた。

やっと、ものみな活動する朝になり、とりあえず両手でヤモリのように壁を伝って電話機のあるリビングまでそろそろと移動し、タクシーを呼んで整形外科に駆けつけた。驚いたことに玄関から道路わきで待機しているタクシーまでのわずかな距離を、杖を付いて歩くのがやっとなのだ。膝から下に痛みと脱力感があって、両手に杖が欲しいような有様である。自分の身に起こったことが理解できず、それでもなんとか診察室にたどりついた。

痛みを発症するに至った経過を細かく聞き出し、レントゲンをとり、膝をあれこれ調べて原因を探っていたお医者様は、やがて納得したように「痛いけどがまんして」と通告して膝に注射をした。きっと太くて大きな注射器だったに違いない。注射をされるときはいつも目をとじて見ないようにしている。

痛みに弱い私だがいまやそんなことは言っていられない。おもむろに診断された病名は「膝じん帯損傷」。寝たままの状態でベッドの上で布団を蹴上げただけで私はスポーツ選手が試合中によくやるような怪我を負ったのである。羽毛布団一枚と綿毛布だけで、決して重くはなかったのに。その理不尽さに戸惑いながらも注射が劇的に効いて、帰りはもちろんタクシーだったが、片方の杖だけで難なく帰宅することができた。

常日頃あまり頼りにならないと思っていた東京在住

の娘が、今回はびっくりしたらしく飛んできて一週間分の食料の買い物をしてくれた。それから二週間ほど戸外に出ることもままならず、高齢になっての一人暮らしの危うさを実感した。何といっても最大のショックは寝た状態でありながら、ベッドの上で怪我をしたこと。転んだわけでもなく、なにかにぶつかったわけでもない。ただ寝ていただけ。それなのに「じん帯損傷」という怪我をするということは普通あり得ない事態である。

三週間近い自宅療養のため、参加しているサークルや友人との会合などの欠席に信じてもらえないような理由を伝えるはめになった。「高齢になるとよくあることで、寝ているときに骨折をしたという人もいるみたいよ」と友人は慰めてくれる。他人事と思っていた笑い話がわが身に起きた。高齢になって物忘れの多さを嘆いているのとはレベルのちがう今回の肉体上の事故は私に大変な打撃を与えた。

５０年、同じ場所で暮らしてきた私の周りの雑多な不要物を改めて見回す。引っ越してきたころに、慰めに植えたはずの家の周りの諸々の雑木は、今や剪定を怠った結果、無遠慮に枝を伸ばして生え茂り、庭一面を埋め尽くす雑草のしぶとさはまさに廃園の趣を呈している。その中にあって、メンテナンスの行き届かない築５０年の古家は悄然と風雨に耐えている。その時々の気まぐれで、趣味で買いまくった陶器の壺やら、４０個に及ぶコーヒーミルのコレクション。処分してしてもつぎつぎに積みかさねられる本。そんな中に老女が一人、ひっそりと暮らしているのだ。

女優有馬稲子はなにかの対談で自分の終末について、先人の言葉（具体的には誰かは語られていない）として「夏羽織一枚残して死ぬ」を信条としていると語っていた。女優として華やかな生活を享受してきた彼女の、老年になってのこの心境は哲学的である。しかし、不要な物はなに一つ持たずシンプルに生きることは若い時からよほどの死生観を持っていないとできないことである。未来がどこまでも続くと思っている若いころ、欲望に任せて身辺に雑物をまとうのは私だけではないだろう。さらに「もったいない」という心情が身に染みている年代に生きてきたので不要のものを処分するのはかなりの決断が必要だ。

私の未来は孤独死であろう。当然予想されるその未来を防ぐべく、何ほどの努力もしなかった。その場限りを生きてきた。更に、実生活ではまことにナンセン

スな「滅亡こそが美しい」という美学を信奉してきたので、その投げやりな生き方の当然のつけが、今私に降りかかっている。この絶望的な肉体の老化と、日常生活を送る上でのアクシデントの多いメンタル面での現実を前にして、ケ・セラセラの私もさすがに憮然としている。いよいよこれからが人生をしめくくる上での正念場であろう。

「メメント・モリ」という言葉がある。ラテン語で、直訳すれば「死を想え」、意訳すれば「死生観」。すなわち「死を覚悟せよ、人間だれでも必ず死ぬということを忘れるな」という意味のようである。古代ローマでは将軍がパレードを行ったとき、後ろに立つ使用人に言わせた言葉で、「将軍は今日絶頂にあるが、明日はそうであるかわからない、自分がいつか必ず死ぬということを忘れるな」という意味の警句で、使用人は気を引き締める役目を担当していたという。

また、死が日常生活の一部であった古代ローマの時代ではこの言葉は、「今を楽しめ」という意味にも使われたりしたが、その後のキリスト教の文化の中に入り込み、「死を常に意識する」という意味あいが多くなって、やがて音楽や絵画など、芸術作品のモチーフとしてひろく使われるようにもなった。中世ヨーロッパでペストが大流行し、数千万という死者が出た当時、死におびえる人々は一瞬の享楽にふけった。都市を覆う腐乱した死体や、あるいは踊り狂う人を後のブリューゲルは「死の勝利」という有名な絵画でイメージした。メメント・モリは日常の中に意識されていたのである。

しかし、死を身近に感じることがないと、生きることにも鈍感になってしまう。高齢者は否応なしに意識せざるを得ないが、草創期にある人でも重篤な病に侵されたときなど「死」を深く考えざるを得ない事態になってしまう。

アップル創業者のスティーブ・ジョブズが２００５年、スタンフォード大学の卒業式で次のようなスピーチをした。かれは人生から学んだ三つのうちの一つ、「死について」次のように語っている。「１７歳の時、次の言葉を知り、衝撃を受けた。――毎日をこれが人生最後の日と思って生きるとしよう。そうすれば間違いなくその通りになる日が来るであろう――」と。ジョブズは１７歳にして確固たる死生観を持っていたのである。

つまり、人生はいかなる時期であろうと死と隣り合わせであることを忘れないこと。「死は我われ全員が共

有する終着点であり、生が生んだ唯一無比の、最高の発明品である」ともいう。死こそは古いものを一掃し、新しいものに道筋をつけてくれる変革者であるということだ。

スティーブ・ジョブズは２００５年、すい臓がんを宣告され余命を覚悟したが、手術をし、奇跡的に回復した。癌と向き合った自分の体験を語ったメッセージとして感動を呼んだ。しかし、２０１１年、５６歳でついに帰らぬ人となった。

写真家藤原新也の、写真に美しい文章が添えられている写真随筆集『メメント・モリ』を読んだ。１９８３年に刊行され、２００８年、刷新されている。出版された当時、「生と死を歌う現代の聖典」と言われ出版界で話題を呼んだ。著者は１９４４年生まれ、東京芸大を中退し、インドやアジア諸国を放浪し、写真に随筆を添えた多数の著作を発表している。『メメント・モリ』は代表作の一つでガンジス川や沖縄などで生と死が交差する一瞬の情景を切り取った写真に清冽な文章が散らばっている「人間は犬に食われるほど自由だ」という写真には死体を喰う二匹の犬の写真が強列だ。

「太陽があれば国家は不要」とのコメントには木の間から登りゆく赤い太陽が美しい。漆黒のなかに文字が一列「死の瞬間が、生命の標準時」。

「黄色と呼べば、優しすぎ、黄金色と呼べば、つややかに過ぎる。朽ち葉色と呼べば、人のこころが通う」静寂の中にたたずむ枯れ葉をまとった木立。

序文では次のように書いている。

「いのち、が見えない。生きていることの中心（こあ）

がなくなって、ふあふあと綿菓子のように軽く甘く、口で噛むとシュッととけてなさけない。しぬことも見えない。いつどこでだれが、なぜどのように死んだのか、そして、生や死の本来の姿はなにか。（略）死は生のアリバイである。メメント・モリ。この言葉は、ペストがはびこり、生が、刹那、享楽的になった中世末期のヨーロッパで盛んに使われたラテン語の宗教用語である。その言葉の傘の下には、わたしのこれまでの生と死に関するささやかな経験と実感がある」。

藤原新也は『たとえ明日世界が滅びようとも』という長い題名のエッセイ集でも

「（略）こうして団地の一室で人知れず腐乱して死ぬ人もいる。人はそれを孤独死と呼ぶ。人はみな孤独の中で死ぬのだ。たとえ家族に取り囲まれた死であろうと一人だけの死であろうと、死に捉えられた人間はみな孤独である。孤独死も又様々な死という不気味さを孤独の中の、一つの形なのだと思う。」と述べている。写真家でありながら、どこかに死を内蔵している研ぎ澄まされた文章の美しさには圧倒されてしまう。

『コスモスの影にはいつも誰かが隠れている』という短編集は、やはり日常の中に潜む死の影の不気味さを描いていて写真家としての評価はわからないが、彼は私の好きなエッセイストの一人である。

写真家藤原新也は『メメント・モリ』という表題で死をタブー視しがちな現代に波紋をなげかけたが、そもそも、だれもが経験することができず、また科学で解決できない「死」を考察するのが哲学や宗教、文学の分野でもあるのだろう。多くの学者が時代によって異なる様々な「日本人の死生観」について書いている。日本古来の「もののあわれ」の無常観は高齢になった今、実に美しく思えるのだ。生者必滅は、世の習い、川の流れに浮かぶ泡沫は、同じところにとどまることなく、現世のことはすべて夢のまた夢。

第二次大戦中は「お国のために死ぬ」のが美徳であった。作家三島由紀夫の座右の銘だったと言われる「武士道といふは死ぬことと見つけたり」という「葉隠」はまた「人間の一生はわずかのことなり、好いたことをして暮らすべきなり」と続く。

ちなみに古代ローマの詩人ホラティウスの詩に「カルペ・ディエム」という語句があるという。直訳すれば「今日という日の花を摘め」、意訳すれば「この瞬間を楽しめ」「今日を大切に」。短い人生で未来に希望を

つなぐよりもその時どきを有意義に使うべきという、「メメント・モリ」に通じるような語句である。

私は五人兄姉の末子である。一番年の近かった6歳上の姉は私が22歳の時、28歳で亡くなった。姉の28年の人生は、同じ環境で育った妹でありながら、私の想像の閾を超えるものであった。戦後、日本に駐留してきていたアメリカ人と恋をするということは、「パンパン」という忌まわしい言葉で呼ばれる職業の女性を意味した。姉の恋人のアメリカ人は背広姿で、どのような任務で日本に来ていたのかわからないが、恋を実らせることのできなかった姉は、両親の説得に応じて心ならずも酒屋に嫁いだが、なじむことはできずに婚家先からの家出を繰り返し、自分の身を亡ぼすように28歳で、医院であった我が家の病室で亡くなった。

父は勤務医であり、母は父と同じ地方都市の病院で働く看護師で、当時としてはめずらしい恋愛結婚をしたという。結婚して地元に内科医院を開業した。

「愛染かつら」という映画が話題になっていた時代で兄や姉は、両親は映画を地でいったのだと話していたのを覚えている。私自身は年代的なずれもあって「愛染かつら」なる映画をみていないが、医者と看護師の恋物語で大スターだった上原謙と田中絹代主演によるもので、まさに一世を風靡したといってもいい映画だったと聞く。

姉の臨終の場には家族全員が立ち会った。最期の時に、父は姉の頭を撫でながら、次のような事を言ったのを鮮明に覚えている。「20年生きようが、50年、80年生きようが、人間の人生なんて長さで測れるものではない。結局何れ人はみな死ぬのだから。その長さにたいした意味はないのだ」と。

父は開業医として多くの死を見てきた。「死ねば無」とよく言っていた。宗教も哲学もなく、ただ死んでいく多くの人々の臨終に立ち会った現実があるだけだったのだ。もう半世紀も前の姉の死は私にとって最も親しい人との別れを経験した最初であり、永遠の別れの悲しみを、身をもって体験した。

遅かれ早かれいずれは「無」に帰する命であれば頃あいを見計らって自ら命を終わらせることも納得できる。しかし、その潮時を見定めて実行に移す人はそう多くはないだろう。

東大の学生だった西部邁は若いころ、全学連の中央

執行委員長を務め６０年安保闘争に参加したが、その後、左翼運動と決別、保守の論客としてテレビにも出演していたが、２０１８年１月、７８歳で自らの命を絶った。「朝まで生テレビ」を時々見ていたので衝撃的であった。もう何年も前から、「病院で死にたくない、自分の最期を他人に命令されたり、弄りまわされたくない」と言っていたという。

１９９４年１１月に出版された『死生論』の中で「死の意識」「死の選択」「死の誘惑」など様々な観点から独自の死生観を述べている。５０代ですでに「死」に捉えられていて、終わるべき時を自覚して行動したのだろう。しかし、最期は自力ではむずかしかったのか、かれの信奉者が２人、リスクを負ってまで自殺をほう助し、罪に問われることになってしまった。

老衰は無残である。これから私は無残の領域に入っていこうとしている。

（２０１８年６月）

死に処刑される生者（ブリューゲル）